

住居と住宅の微妙な関係

『建築雑誌』編集委員会およびもれなく付いてくる飲み会では、建築設計に関する美学・哲学が爽やかに語られる。でも時折、発想の出発点の違いを感じる。住居学は住み手の視点から考えるものだが、建築は建てる意義が大切らしい。中での生活はいいのだろうか？ 住空間から人が育つて感覚は住居学だけ？ そこで若干の考察。

「住居」と「住宅」の違いをうまく説明できますか？

住宅と住居、似ているが、意味の違いを正確に説明できる人はどのくらいいるのだろうか。広辞苑では住居は「人のすみか。すまい」、住宅を「人が住むための家。すみか」と言っている。これではまるで同じ意味である。だが、みんなにちゃんと知ってほしい。

私が所属している学科は「住居学科」とは言うが、「住宅学科」とは言わない。それに日本広しといえども「住宅学科」という学科名はどこにもつけられていない。多分。ということは、なんらかの意味の違いがあるということである。

私たちは入学したての初々しい住居学科学生にいつもこう言っている。「住居と住宅はどう違うと思う？」「住宅は家という器を指すのに対して、住居とは器だけでなく、中で行われる人間の生活のことも含めた意味なの。住宅プラス住生活を包含するのが住居。そんな広い意味をもった言葉なんだよ。だから住宅学科ではなく、住居学科。そして人間や生活から発想してより良い空間を考えていく考え方を大切に

しているんだね」と。両者の意味の違いを私たちはそんなふうに理解している。

大学における建築学科と住居学科のカリキュラムの違いも、そうした考え方の違いを反映している。大学ごとのカリキュラム設計は当然ながら、教育機関独自の考え方を示していて、あたかも一人ひとりの性格のように見える。建築学科から少し脇道にそれたところにいる住居学科なのだが、そのめざすところである建物の中にいる人間の存在の重要性に着目したカリキュラムを有している。ところが各大学のカリキュラムも居住性や機能性と人間の関係、人間に立脚する心地よい空間のあり方に関する授業が増えてきたような気がする。最近になって建築関係学科も、内部の人間や生活に目向き始めたという流れを感じるのは私だけだろうか。

「いい住宅とは？」

住宅を設計してみると自然に考えるようになることは「いい住宅とは何か」ということではないだろうか。

設計審査をお引き受けする機会があり、たまげる思いをした話をひとつ。それは集合住宅でのお話。集合住宅の敷地計画は、当然住棟が主役のはずだが、その物件はなんと駐車場が主役だった。そして南向きの窓はひとつもなく（ほんとに）、お隣の住棟とかなり接している。大都会の六本木にでも住もうというならそういうこともありかもしれないが、れっきとした郊外住宅である。別にほかの品質が劣るという

わけではない。だが、住宅でユーザーに重視されるのは通常、日当たりと風通しである。この原稿を書きつつ辺りの反応をうかがってみたが、南向きなしへの批判はあまりなかった。ただ私にとって配置計画と居住者の住要求に添うことはキモであることを悟った。配置計画だけですぐれた住宅が決まるわけではないが、こうした難ありの計画を世に生み出す決断をするというのは勇気のいることだった。絶妙な配置計画、考え抜かれた住棟デザインがあることを知っている身にとって、その計画には何か文句をつけずにはいられなかった。そこで私は言ってみた。「赤点をつけられないんですか。再提出です」。

それは特にとりあげられることなく、ほかの冷静な審査者によって審査は円滑に進められた。建つことが決まった。

私はできればお願いしたい。住居なんだから住む人の気持ちになって設計してほしい。その計画からはそろばん勘定が透けて見えた。だが、利よりも義。NHK大河ドラマの受け売りだが、利だけを選ばないでほしい。

建築は作品と呼ばれるが、住宅は美術品というわけでもなければ、設計者だけのものでもない。住む人のためにいい住宅を生み出しているのだということを私たちはつねに忘れてはいけない気がする。

では住教育——家庭科の密かな貢献

つい最近大人に聞いた「子どもになってほしい職業ランキング」で建築

ひらた・きょうこ

1965年生まれ／日本女子大学卒業／日本女子大学大学院修了／リスクコミュニケーション、住居構造・安全、居住性能／著書に『事例に学ぶ建築リスク入門』『長く暮らすためのマンションの選び方・育て方』／2003年日本建築学会奨励賞受賞

家は8位だった。それはすごいと思ったら、順位がかつてよりは下がったらしいのだが、ここで指摘したいのは建築教育に初めて接する機会の重要性である。建築のおもしろさを次代に伝える試みは十分になされているのだろうか。

2008年末にひっそり発表された高校家庭科の新学習指導要領。これからの10年間の教育コンセプトが発表された。実は、小学校の総合学習、小学校から高校へと続く家庭科、これが現在の建築教育・住教育の主たる場なのだ。特に家庭科は男女必修。数の上でもおろそかにはできないが、そこでは住教育は惨憺たる有様である。まず普通高校家庭科教員は家政学は学ぶが、住居出身でないことが多く、よく知らないために教えないことが多い。住居は誰もが暮らす器なのだが、どのような住宅を生み出せばよいか、そうした視点では教科書はできていない。教科書の記述はポイントをおさえて簡潔によくまとまっているが、実際の授業でとばされてしまったら元も子もない。

消費者問題の専門家からは、人が経済的に破綻する時には住宅ローン問題が原因の多くになっていると聞いた。未曾有の経済危機に直面し、派遣打ち切りとともに住まいまで失う人が続出している。それについても教育では、どこが担うのか。住生活と家庭の経済については家庭科が担っている。

いい家をつくり出し、いい家に対するコストを健全に払うことのできる生活主体者が求められているのだが、そ



できれば、唯一、住みたくない家——拘置所です

れらはまだまだ高校の現場ではうまく教えられていない。

Ⅰ 住居と住環境、どっちが代表的？

高校の学習指導要領を作っているときには、「住宅と住居の違いを説明して」「コミュニティの定義を」「住環境とはなにか、住宅を含むのか」との質問が私にも寄せられた。どれもこれも確かに使い慣れてはいるが、意味を正確にさっとは言えないような言葉だ。だが、ここでみんなで復習しておこう。住居と住宅の違いにはすでに言及したので、住環境の意味、これを正しく言えるだろうか。ネットの検索エンジンやホームページでは、多くの人が住環境という言葉在住居分野を表す広範囲な代表的キーワードとして多用してい

るようである。住居よりはむしろ住環境というキーワードを思い浮かべる人も多い気がする。

定義については、『住環境 評価方法と理論』[A]等の書籍があるので、自分で勉強してほしいのだが、住環境は住居や生活の場を取り巻く生活環境の総体という意味である。ま、平たく言えば周辺環境ということであろうか。そして、書籍[A]には住居の意味まで書いてあり、住居は住環境も含む総称なのだそうだ。住居、あんたの器は大きい。

注

A—浅見泰司編／『住環境——評価方法と理論』／東京大学出版会／2001.11.15